

# 第一高等学校特設予科時代の郭沫若 —「五校特約」下の東京留学生活—

劉 建雲

キーワード：郭沫若，五校特約，第一高等学校特設予科，房州海水浴，住所，真砂町

## はじめに

郭沫若は中国近現代史において論議の多い人物である。毀誉褒貶相半ばするが、否定的な評価は基本的に彼の私生活における責任なさと、建国後の各回の政治運動に見られた一貫性のない言動に集中している<sup>(1)</sup>。同時に、彼は中国ロマン主義文学の旗手、現代詩歌の基礎を築いた詩人、唯物史観に基づいた史学研究の先駆者、現代中国の革命的イデオロギーの重要な解釈者と宣伝者と称され、中国の近現代社会の進展に大きな影響を与えたことも事実である<sup>(2)</sup>。周知のように、郭沫若（1892-1978）は青年期に日本に10年間（1914-1923）留学し、壮年期に亡命で日本に10年間滞在していた。留学期に『女神』（上海泰東書局、1921年）を出版して中国現代詩歌史における不動の地位を確立し、河上肇の著書を翻訳してマルクス主義を信奉するようになり、亡命期は中国古代社会と古代文字の研究で卓越した業績を残している。よって、「彼の思想の形成・転化は全て日本留学中になされ」、「彼の人間形成は日本で完成した」と、蘇徳昌が「中国人の日本観—郭沫若」という文章の中で指摘している<sup>(3)</sup>。しかしながら、「彼の日本滞在中の生存状態について今なお脳裏で完全なイメージを描くことができない」と嘆かれるように<sup>(4)</sup>、郭沫若の20年間にわたる日本滞在の実態とその人間形成のプロセスに関していまだ未解明のところが多いと言わなければならない。

筆者は同じ日本留学の経験者として、従来の日中教育文化交流史研究の視点から留学先の岡山大学文学部の先輩にも該当する郭沫若の日本留学に強い関心を持ち、日本在住の利便性を生かしてその全体的な把握を長年試みてきた。そうすることで、郭沫若研究に必要な基礎データを提供できるのみならず、百十数年前に現れたあの史上初の中国人日本留学ブームの全容解明にもつながると思うからである。

郭沫若の日本留学は東京時期と、第六高等学校時期（岡山、以下六高と略記）、九州帝国大学時期（福岡、以下九州帝大と略記）に分けられる。六高時期に関しては、1995年『中国研究月報』No.570に掲載された名和悦子「岡山における郭沫若」があり、六高時期の郭沫若の成績・交友関係・下宿先などについて先駆的な考察が行われた。それを踏まえて、拙稿「岡山時代の郭沫若—地元市民とのふれあいをたどりながら—」（『人民中国』2009年5月）、「郭沫若在岡山の住所考」（『郭沫若学刊』総第92期、2010年）が公表され、さまざまな史実が明らかになりつつある。九州帝大時期の郭沫若については、武継平が『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代—』（九州大学出版会、2002年）のなかで、郭沫若の母校で学ぶ優越性を生かして「福岡における郭沫若の実生活を克明に調査」したとされている<sup>(5)</sup>。ただ、郭沫若の日本留学の一駅目である東京時期、とりわけ第一高等学校特設予科（以下、一高特設予

科と略記) 時期の生活と学習のみが深く追究されていない。唯一前掲武継平の著書には若干論及されているが、全体的な調査と具体的な検証は行われておらず、史料の扱い方や論述・論点にも再検討を要するところが認められる。

さて、今年(2024年)は郭沫若の日本留学百周年である。1914年、「五校特約」が実施されていた時期に彼は日本に留学してきた。「五校特約」は、日中政府間に1907年に締結され、1908年から実施された文部省直轄5校による留学生教育受託事業であり、清末民初の中国人日本留学が「多数速成」から「少数正統」への政策転換の動きのなかで最も注目されてきた事業である<sup>(6)</sup>。5校とは、東京高等師範学校、東京高等工業学校、千葉医学専門学校、第一高等学校、山口高等商業学校のことを指すが、実施期限は15年間、費用は中国の地方各省によって分担され、毎年入学試験によって百数十名が選抜されていた。そこで、本稿は、「五校特約」下の中国人留学生生活の一事例として郭沫若が留学していた当時の時代と環境に着目し、『桜花書簡——一九一三年至一九二三年家信選』(以下、『書簡』と略記)<sup>(7)</sup>、『第一高等学校六十年史』(1939年。以下、『六十年史』と略記)などの一次資料を解説・検証して、さらに実地調査を加えることで、一高特設予科を中心とした東京時代の郭沫若の勉強と生活の実態解明に努めた。そうすることで郭沫若の一見雑駁な思想・人生の原点探索にも何らかの役に立つことができれば幸いである。

## 1. 特約五校を目指した受験勉強

### 1-1 来日前の郭沫若の基礎学力—なぜ日本留学への道を行んだのか—

郭沫若は1892年11月16日、四川省嘉定府樂山県觀峨郷沙湾鎮の商人兼地主の家に生まれた。8人兄妹の三男であった<sup>(8)</sup>。彼が日本留学への道を行むに至ったのは、2人の兄の影響が大きかったと言える。渡日前の日本事情、日本の留学生教育に関する知識と情報はほとんど2人の兄からもたらされたものであった。

長兄郭開文は、『欽定学堂章程』(1902)が發布されてから四川省で最初に創られた新式専門学校の一つである成都東文学堂<sup>(9)</sup>の第1期生(1903.12～1904.12)で、1905年2月省費派遣留学生として来日していた。彼は12歳の郭沫若も連れて来たかったが、親の反対で実現できなかった。しかし、彼の呼びかけで樂山県の若者が十数人も一緒に来日したという。開文は1906年9月から1909年7月にかけて東京帝国大学法科大学の「選科」に在籍し、聴講生として政治学を学んでいた。1907年に『漢訳法律経済辞典』を同期・同郷の張春濤と共訳して奎文館書局より刊行している。

また、次兄開佐は、『欽定学堂章程』が發布されてから四川省で最初に創られた軍事学校である成都武備学堂の第1期生(1903.12～1906.12)であった。開佐は1906年冬「軍事視察」の名目で日本に派遣されるが、折しも「五校特約」が締結された年であった。来日した開佐は、「軍事が嫌いで科学を学びたい」と志を改め、生活は省費留学生の長兄に頼りながら特約五校への受験勉強を始めた。しかし、初年度の選抜試験は受験生が2000人に及び、開佐は受験に失敗して、その年末帰国せざるを得なかった<sup>(10)</sup>。

2人の兄の影響を受けて、郭沫若は幼少期から日本を「憧れの土地」と考えていたのである<sup>(11)</sup>。

郭沫若は4歳から自宅の私塾である「綏山山館」に入り、『詩経』・『春秋』などの中国古典を学び、いわゆる「中学」の基礎をしっかりと固めていた。しかし、近代科学の基礎知識は一切なかった清末の古い知識人が西洋文明の摂取を急ぐあまり一気に日本になだれこんできたものの、結局近代の高等専門的な学問を習得できなかった人が多かった。長兄郭開文もその一例と言える。郭沫若の場合はどうであろうか。ここでは、彼の自叙伝『少年時代』<sup>(12)</sup>などにに基づき、来日前に築いた近代教育の基礎学力を考察しておきたい。

1906年春、13歳の郭沫若は試験を経て新式の嘉定高等小学堂に入学する。同小学堂は、科举制度が

廃止されてから楽山県に設立された最初の小学堂であり、生徒の多くは、「院試」という科挙試験の最初の関門を目指していた「老童生」と呼ばれる旧い知識人であった。小学堂の教習には日本留学帰国者が2人いて、1人は帥平均（1870-1953）と言い、四川省が1901年に日本に派遣した最初の省費留学生である。帥は嘉納治五郎の弘文学院で勉強していたというが、同小学堂での担当科目は算数、音楽、体操、国語で、その内、国語以外の課目内容は貧弱だったという。もう1人は杜少裳（1880-1936）と言い、同じく弘文学院に留学していた。杜は、1906年夏に帰国したばかりで、担当科目は数学と物理、科学の知識は帥より上だったという。

1907年秋、嘉定中学堂が新設され、成績優秀か年齢の高い高等小学堂の生徒が進学することとなった。郭沫若も進学し、小学堂生活はわずか1年半で終わった。中学堂の授業も新設間もないため、教師陣の力量は極端に貧弱であった。地理の教習は日本と朝鮮の方角を間違え、博物の先生は烏賊の口を肛門だと言い、英語の先生は日本の正則英語学校の教科書を使ってアルファベットの26文字だけを半年間もかけて教えた<sup>(13)</sup>。国内外の短期速成教育で育った教師では、郭の旺盛な知識欲が満たされることはなく、外の世界への憧れが募るが、それも実現できず自暴自棄になる。

1910年春、成都高等学校分設中学堂に転入する。翌年、辛亥革命と清帝退位という中国近代史における波乱の時期が訪れ、成都の教育は絶望するほど混乱に陥る。中学堂卒業生は「拳人」の身分に相当するということで、成都には分設中学堂・成都府中学堂・華陽県中学堂などの官立中学堂以外に、私立中学堂も多数存在していた。官立中学堂は「人情の世界」と言われ、私立中学堂は「卒業証書を売るのが公然の秘密」だったという。この他に、私立の法政学校が40～50校もあり、「法政の人材を造ることは職人の造花より簡単」であった<sup>(14)</sup>。

1913年春、分設中学堂を卒業し、成都高等学校に進学する。高等小学堂は1年半で終わったが、中学堂は5年半を費やしたことになる。

同年夏、天津陸軍軍医学校が全国各省で選抜試験を行うことになるや、郭沫若はこれに挑戦し合格した。成都を離れるチャンスを得たのである。しかし、この官立軍医学校には外国人教習は1人もなく、著名な中国人教員もいなかったことに失望した郭沫若は、入学を待たずに北京に赴き、川辺経略使代表を務めていた長兄開文を頼った<sup>(15)</sup>。

1913年末、開文の成都東文学堂時代の友人で、当時国会議員を務めていた張次瑜が訪ねて来る。翌日日本視察のため渡日するというので、郭沫若は彼について来日し、2人の兄と同じように日本留学への道を歩むことになった。

京奉鉄道に乗り、奉天・安東を経由して、まず向かったのが韓国の釜山であったが、釜山領事館で領事をしていた柯榮階も開文の東文学堂時代の同期生であった。領事館内に1週間留まり、1914年の正月も釜山で迎えた<sup>(16)</sup>。処女作『牧羊哀話』はこの時の経験に基づいて書かれたものと考えられる。そこから海を渡り東京に辿り着いたのが1914年1月13日であった<sup>(17)</sup>。

ところで、郭沫若の渡日に関して、武継平は張次瑜の発した「どうして日本に留学しに行かないの」の一言が決心させた点に着目し、郭の「日本留学は計画性のまったくない偶然なきっかけによるもの」だったと述べている<sup>(18)</sup>。しかし、この時は長兄の郭開文が日本遊歴から帰国したばかりである。彼の頭に弟を日本留学に送り出すという腹案がまったくなかったとは考えにくい。彼も張次瑜も日本の留学事情と自国の留学政策を熟知していた。特約五校の入学試験は難しいこと、準備は通常1年半を要すること、今の自分にそれだけの費用も捻出できないことを考慮して、あえて口にしなかったのであろう。幼少期から海外に憧れ、2人の兄の日本留学を見て育った郭沫若も、軍医学校の入学を放棄した時点で、日本留学が念頭になかったとは言いきれない。彼が気にしていたのも経費問題であった。実弟の経験から発した張次瑜の「若い人は頭が速いから半年の準備をすれば受かるだろう」という言葉が、郭兄弟に最後の決意をさせた違いない<sup>(19)</sup>。きっかけは「偶然」かもしれないが、「計画性のまったくない」行動と

は考えられない。

## 1-2 異国での初めての下宿生活

郭沫若は、みずからの「五十年簡譜」(1941年)や自叙伝などにおいて、自身の文学創作と世界観の形成が日本で受けた留学生教育、及び生活していた周辺の文化的社会環境にどんな影響を受けたのかについてほとんど語っていない。ただ、留学期に彼が故郷四川の家族に送った手紙のなかでは生活と勉強の状況を頻繁に報告している。それらの手紙は第一夫人の張瓊華に保管され、文革後に現地の研究者達が整理編集した史料集として刊行されている。それが前掲『桜花書簡——一九一三年至一九二三年家信選』である。『書簡』は、郭沫若が渡日直前から九州帝大医学部を卒業した1923年までの手紙66通を収録し、留学期の彼の生活と勉学を知りたいへん貴重な史料である。

『書簡』収録の家信4によれば、長兄がくれた重さ6両の金の延べ棒を手にして来日した郭沫若は、最初東京府小石川区大塚窪町24番地(現・文京区大塚3丁目辺り)に住んでいた。家主は「戸村」と言い、すぐ近くに東京高等師範学校があった。日本での初めての下宿生活と、取り組んだ受験勉強について彼は次のように述べている。

「こちらの生活水準が高く、1間の家賃は月20円前後が必要です。食事は質素です。朝食はパン2枚、砂糖1皿、牛乳1本で、昼食と夕食はいずれもおかず1品、ご飯1<sup>こしき</sup>甑、漬物少々のみです。私の住んでいるところは家賃が15.5円、比較的安いほうです。来たばかりの時は食事が口に合いませんでしたが、最近慣れてきてなかなかおいしいと思うようになりました。木炭が非常に高く、毎日少しだけ使って暖を取るのにも1角が必要で、我が故郷の1ヶ月分の費用に相当します。近来神田で日本語を勉強しています。下宿に4、5キロ離れていて、毎日行きは徒歩ですが、帰りは電車に乗らなければなりません。午後5時に授業が終わり、夕飯に間に合うよう急がなければならないからです。電車に2回乗れば中国のお金90文がかかりますので、毎月交通費は1.5円が必要となります。学費、洗濯代、入浴代などの雑費を合わせると、月30円がなければ足りません。(中略)同宿人の楊伯欽は撮影が得意で、昨日写真を撮ってもらいました。楊君は性向が端正で、さすが師範を学ぶだけあります。彼と一緒に住んでいて、私を弟のように可愛がってくれて、すべては彼の教えと導きに頼ります。勉強のための教師を依頼するのも彼に頼ります。交誼が長くなるにつれて甚大な薫陶を受けました。(中略)残念なことに、彼は今年卒業し、まもなく帰国することとなります。盲人が道連れを失おうとしていて、彼と知り合うのが遅く、離れるのがまた早いのを恨みます。鹿蘋とは時々行き来しています。異国で同国人の顔を見るだけでも十分嬉しいのに、同郷且つ親戚はなおさらです。」(原文は中国語、日本語訳は筆者。以下、特に断りがなければすべて同様)

ここに記された留学生の生活状況とその水準は、当時流布していた日本留学案内書の紹介とほぼ一致している<sup>(20)</sup>。同宿人の楊伯欽も郭開文の友人で、成都東文学堂時代の同期生であった。彼はこの時東京高等師範学校の3年生で、下宿探しや神田の日本語学校への交渉と教師の紹介など、来日したばかりの郭沫若の世話役を務めたと考えられる。「鹿蘋」は苗字が呉、郭沫若と同年齢で、9年前に開文と一緒に来日し、当時一高本科の2年生であった。妹・蕙貞の旦那の長兄ということから、「同郷且つ親戚」のわけである。

大塚窪町24番地の下宿屋に郭沫若は1914年1月から一高特設予科に入学後の9月末まで8ヵ月以上住んでいたと考えられる。

## 1-3 一高特設予科の選抜試験

民国初期の日本留学政策は、清国留日学生監督処が設置されてからの官立校重視の政策を援用していた。ただ、軍閥混戦などの国内の混乱が深刻化するなか、各省では負担金送付難が頻発し、多くの省は

「五校特約」以外の官立校留学生の学費負担を相次いで拒むようになるため、実質上5校への進学は当時の留学生にとって目的達成のためのほぼ唯一の確実な選択肢となった<sup>(21)</sup>。「五校特約」は、前述したように文部省直轄の東京高師、東京高工、千葉医専、一高、山口高商の5校を指す。これらの学校に入れば教育水準が保証されるだけでなく、入学試験に合格すると留学生活に必要な「官費」が祖国から支給されるので、当時留学生の間では競争が非常に激しかった。

郭沫若も当然5校を目指した。ただ彼は師範学校を望まず、1914年度山口高商が留学生を募集しなかったため、結局選択肢は東京高工・千葉医専・一高の3校のみであった。文系が得意だったが、辛亥革命前後の成都教育界の混乱と腐敗に対する嫌悪感から、中国の「読書做官（勉強は立身出世のため）」という悪習に反発して文科を選ばず、「実業」と「医学」の二つに志望を絞ることになる。

特約五校の入学試験は倍率が高く、7、8年受けても受からない留學生がいたという。押しつぶされそうなプレッシャーを抱えて、郭沫若は勉学に全力を注いだ。来日して2ヵ月後の家信5（3月14日）において、彼は勉強の進捗状況と受験への心構え、および経済面の厳しさを次のように綴っている<sup>(22)</sup>。

「私が日本に来て2ヵ月になりました。日常会話は少しできるようになり、最近作文も書きはじめました。まだ上手とは言えませんが、もう思うことを苦勞なく書けるようになりました。本や新聞もだんだん理解できるようになりました。この調子だと半年頑張れば、6、7月の受験に挑戦できると思います。私はできるだけ出費の節約に努めています。1月は来たばかりで、書籍や被服、日用品などを若干購入し、合わせて60円ほどは使いました。2月は27円しか使っていません。そのうちの4円はまた予想外の出費です。来日してから換金するたびに野村氏の世話になったので、謝礼として3円を使いました。ほかに、目の治療で1円使いました。少し疲れて充血したのです。今もう全快しました。この3月は25、6円があれば十分足りると思います。」

要するに、この時点で数ヵ月後に控える前記3校の受験に対して多少は自信が付いたのである。彼は6月に東京高工を受験したが失敗し、7月にまた一高と千葉医専を受験して、結果は一高特設予科の第三部に合格した。受験勉強に費やした「半年たらず」は当時においてもっとも短かったと、郭自身は書いている<sup>(23)</sup>。

ところで、一高特設予科の入学試験は、開始当初は毎年2月に清国公使館留学生監督処が日本在住の受験生から志願者を募集して一高に連絡し、3月初めに選抜試験が行われ、4月に新学期は始まっていた。入試がいつ7月に変更となり、新学年がいつ4月から9月に変更されたのかは不明である。一高は当時三部制を採用していたので、試験科目も日本語・外国語・数学が共通で、第一部に進学したい者には地理と歴史、第二、三部に進学したい者には物理と化学がそれぞれ課されていた。ちなみに、初年度（1908年）の入試日程は次の通りである。

4月10日	8:00～10:00	国語ノ書取、作文
	10:00～	国語ノ会話
4月11日	8:00～12:00	数学（算数、代数、幾何）
	13:00～17:00	英語（日語英訳、英語日訳） <sup>(24)</sup>

試験の結果、志願者210名のうち、60名が合格し、入学している。また、『六十年史』によれば、一高は受験生に対して特別の手配をすることはなく、特設予科に入りたい留學生はおのこの市内の私塾で日本語・英語・数学などを学び受験準備をしていたという<sup>(25)</sup>。これは郭沫若が残した記録と一致する。郭沫若が通っていた日本語学校は、教師を選ぶことができたことから、集団教育というより個別指導だったのであろう。随時入学してくる留學生に対する効果的な指導方法であったと考えられる。郭沫若は受験準備の半年間、宿泊先から神田の日本語学校までの通学時間を除けば、ほとんど外出することもなく、「一生涯もっとも勤勉な時期」を過ごしたと記している<sup>(26)</sup>。

#### 1-4 初めての学外近代体験—房州海水浴

一高特設予科の入学試験に合格した郭沫若は、さっそく楊伯欽、呉鹿蘋と3人で房州（現、千葉県南部）へ避暑に行った。家信8（7月28日）には「東京は人口密度が高いので、夏に入るととても住みづらいです。先日楊伯欽、呉鹿蘋と一緒に房州へ避暑に来ました。ここの風景は素晴らしいとは言えませんが、気候は東京より爽やかです。その上、海が近いので、毎日海水浴をしていてとても楽しいです」とある。休暇中の8月29日に彼は初めての官費を受け取った。

『向陵誌』（1913年）によると、房州は明治後期からすでに一高を中心とした首都圏各学校の主な水泳練習場であった。特に北条の鏡ヶ浦は風がなければたいへん穏やかで、理想の水泳練習場だったという。毎年7月頃になると、大勢の一高健児が続々と海辺に設けられた寄宿舎に集まり、師範の指導のもとで水泳術を競い合った。「沖島廻遊」や「那古遠泳」に挑戦し、さらに他校と「関東聯合游泳大会」を開催して、海辺を大いに賑わしていた。大正3年11月発行の『第一高等学校校友会雑誌』239号に水泳部の「部員一覧表」が掲載され、そのなかに中国人と思われる「周昌寿」・「陳震異」の名前も見られる。

房州での避暑生活は、先輩の楊伯欽と呉鹿蘋が主導したと考えられる。3人は共同で借間し自炊生活を送りながら、7月下旬から9月初め頃まで滞在した。当時京橋から北条までは汽船が昼夜を問わずに運行し、専用客船直行便の運賃は片道85銭だった。水着などの用品は現地でも調達できるので、着替え2、3枚持参すれば気軽に行けたという。

四川の奥深く峨眉山の麓に生まれ、深さ1尺以上の川へ入ることさえ家の決まりで禁じられた郭沫若は、この初めての海水浴により「生まれ変へつた」新鮮な感覚を得たという。ただし、水泳はたいして進歩しなかった。彼は水泳を習った時の体験を後々、「経験がなかつたので口を開いた儘、いきなり水泳部の受持に頭を海へつつこめられ、潮水を一杯飲まされて、とても塩ばかつた」と思い出している<sup>(27)</sup>。また、呉鹿蘋が「その時、郭さんは水泳ができなかつたので、ある日1人で海辺へ泳ぎに行き、危うく溺れ死ぬところを、日本人に助けられ、借間に送りどけられた」というエピソードを語っている<sup>(28)</sup>。郭沫若は水泳に恐怖心をもつようになったのかもしれない。避暑生活が終わった時点でたった十数メートルしか泳げなかつたことが彼の手紙に記されている。六高時期の彼もよく旭川で涼んでいたが、30メートル以上を泳いだ記録は見当たらない。

水泳は覚えられなかつたが、それは彼が呑気に海辺の生活を満喫することを妨げなかつた。よく月夜に友人を誘いボートを操って鷹島や沖島を巡り、時としては酒を携帯して島に上陸して飲んだりした。沖島まで500メートル、鷹島までは750メートルほどの距離で、一高健児が水泳を練習するコースでもあった。郭沫若は1ヵ月以上にわたって海水浴を続けたため、身体が真黒となり、東京に戻ると友人から田舎男とからかわれたという。

見城悌治「近代千葉における中国留学生と海水浴体験」は、中国人留学生の海水浴経験をもう一つの日本における「近代体験」として捉えている<sup>(29)</sup>。日華学会主催の房総「銷夏団」は1923年に始まるが、その10年も前に房州の海岸はすでに中国人留学生の好む避暑地であったことが、郭沫若の記録でわかつた。

## 2. 第一高等学校特設予科における郭沫若

### 2-1 特設予科の教育内容

第一高等学校の留学生受け入れは、1899年9月浙江省派遣の聴講生8名の入学をもって嚆矢とする。彼らは日華学堂で1年ほど日本語を学び、すでに「講義を理解し得る」レベルに至っていたという<sup>(30)</sup>。これに次いで、京師大学堂より選抜された生徒31名が1904年1月に入学している。「将来重要な地位

に任用する」という清政府のねらいがあったため、一高は全校を挙げて養成に努めた。31名の留学生は全員一高の寮に入り、日本人学生と起居を共にしていた<sup>(31)</sup>。

1908年に設立された特設予科は、本科の三部制にあわせた学科課程が編成されている。『六十年史』には特設予科の学科課程が三つ収録されている。

一つ目は、「自明治四十一年四月至同四十二年七月 明治四十一年四月入学清国留学生二課スル学科目及毎週授業時数」で、いわゆる初年度（1908年）のものである。留学生は2組に分けられ、将来本科第一部へ進学する者は第1組、第二、三部へ進学する者は第2組とし、修業年限を1年半と想定した五つの学期に基づいて、それぞれ異なった学科課程が編成されている。二つ目は「自大正七年九月至同八年六月 特設予科学科目及毎週授業時数」で、1918年度の学科課程である。本科の三部制に完全に合致した3種類の学科課程が編成されていて、一高が文理二科に改編される直前のものであり、三部制時期の最後のものでもある。三つ目は文理二科に変更後の1919年に編成された学科課程である<sup>(32)</sup>。

それでは、一高特設予科で郭沫若はどのような科目を履修し、各科目にどれぐらいの時間を費やしたのであろうか。この点について、武継平が前掲書において、『六十年史』第3章「特設予科及特設高等科」の「総説」を取り上げ、「大正十四年八月十一日その規定を創定するに至る迄は、別に規定を設けざりき。この時制定を見たる規定は在来施行し来りし通り定めしものなれば、これによりて以前の特設予科教育の状況をも察知するを得べし」（473頁）との文言に基づき、同章の「各説」に掲載された一つ目の学科課程の第2組の部分を取り出して、郭沫若が「在学中履修した」と考えられる学科目と毎週の授業時間数を紹介している。しかし、前述したように、一つ目は1908年のもので、修業年限は1年半、五つの学期からなるものである。学年も4月から始まるものであり、これをもって郭沫若の学習状況を判断するのは不適切に違いない。また、「総説」にある「大正十四年八月十一日その規定を創定するに至る迄…」云々の文言は、一つ目の学科課程と無関係である<sup>(33)</sup>。

さて、前述した三つの学科課程のなかで、郭沫若が履修したものとして二つ目をもっとも近いと考えられる。同課程には「旧規定」（1918年前）の授業時数も併記されているので、ここに紹介しておく、郭沫若は一高特設予科でどのような課目を勉強し、特設予科がどのような留学生教育を行ったのかを知るうえで役に立つであろう。

資料1は、二つ目、つまり三部制時期の特設予科の学科課程である。（ ）印が付いているのは、原資料に併記された「旧規定」、いわゆる1918年度以前の教育科目と授業時数である。資料1から分かるが、1918年度以前理科の第二部と医科の第三部の学科目と毎週授業時数は全く同じである。文系の第一部も「旧規定」では「歴史」があって「図画」はないところを除けば、第二・三部と同じである。1918年度は第二部ではドイツ語と博物、第三部では博物と図画がなくなり、それらの時数が数学・物理・化学の3課目に振り当てられている。共に数・理・化の教育を強化したという形になった。逆に、第一部は物理・化学・博物の課目を取り止めて、数学の時数も半減し、日本語・英語・歴史の時数を増している。重要課目の時数をたっぷり保障したより合理的な調整と思われるが、各部の総授業時数が減ったこと、中でも第三部の時間数減少幅がもっとも小さかったことにも注目すべきであろう。

郭沫若の自叙伝『創造十年』によると、「医科の第三部は生徒数が少なく、性質上文科と近いので、第一、三部は一緒に授業をしていた。また、物理・化学・博物のような課目は教室が大きいので、3部はそろって授業を受けていた」とある<sup>(34)</sup>。第一部の物理・化学・博物と、第二、三部の博物は1918年度になくなっていて、郭沫若が履修したのは（ ）内の「旧規定」だったことが考えられる。50～60名の新入生を相手に、言語類と数学は第一、三部が共同で、物理・化学・博物は三つの部が共同で授業するといった仕組みである。

要するに郭沫若は一高特設予科で日語・英語・ドイツ語・数学・物理・化学・博物などの基礎科目を勉強した。三つの部は共に数学教育を重視し、語学の授業時数がもっとも多く、トータルで全体の半分

近くを占めている。週に3時間の体操も今考えれば多いように思われるけれども、留学生の健康維持・体力向上に欠かせない科目であり、当時においては一般的だったようである<sup>(35)</sup>。

各科目はどのような教材を使用し、授業はどのように行われるのかについても具体的に決められていた。ここでは郭沫若が受講した第三部の学科課程の関連箇所を抽出して資料2に整理しておく<sup>(36)</sup>。

資料1 三部制時期の「特設予科学科目及毎週授業時数」

部別 科目	第一部	第二部	第三部
修身〈倫理〉	1 (1)	1 (1)	1 (1)
日 語	8 (6)	6 (6)	6 (6)
英 語	8 (6)	6 (6)	6 (6)
独 語	3 (3)	(3)	3 (3)
歴 史	4 (3)		
数 学	3 (6)	8 (6)	8 (6)
物 理	(2)	3 (2)	3 (2)
化 学	(2)	3 (2)	3 (2)
博 物	(2)	(2)	(2)
図 画		2 (3)	(3)
体 操	3 (3)	3 (3)	3 (3)
計	30 (34)	32 (34)	33 (34)

出典：『第一高等学校六十年史』511-512頁による。

資料2 特設予科第三部の学習内容と教材

日本語	講読	平易ナル国文及科学的ノ論文等（四時）ヲ課ス 専ラ生徒ヲシテ輪講セシム
	文法	文語法ヲ筆記セシム
	作文	文語文ヲ課ス
	書取	新聞記事科学書ノ筆記ヲ課ス
	会話	第二学期ヨリハ専ラ劣等生ニ課ス、口語法ヲ合セ説クベシ（以上二時）
英語	少クトモ四時間ハ一人ノ講師受持ツベシ、教科書ノ相談一部ニ同ジ（一部は「講師二人又ハ三人ハ用書ヲ相談シテ決定シ其難易ニ偏セザル様注意スベシ」とある。）	
数学	代数	（四時）教科書ニヨリ一次方程式聯立方程式二次方程式（虚数ヲ論ズ）級数順列組合ヲ課ス
	幾何	（三時）平面立体ヲ教科書ニヨリ課ス
	三角	（一時）代数ト合セテ学期ニヨリ時間ヲ斟酌スベシ
物理	教科書ニヨル	
化学	教科書ニヨル	
図画	機械画ノミヲ課ス、投視投影トモニ課ス。ペンシルヲ用フ	



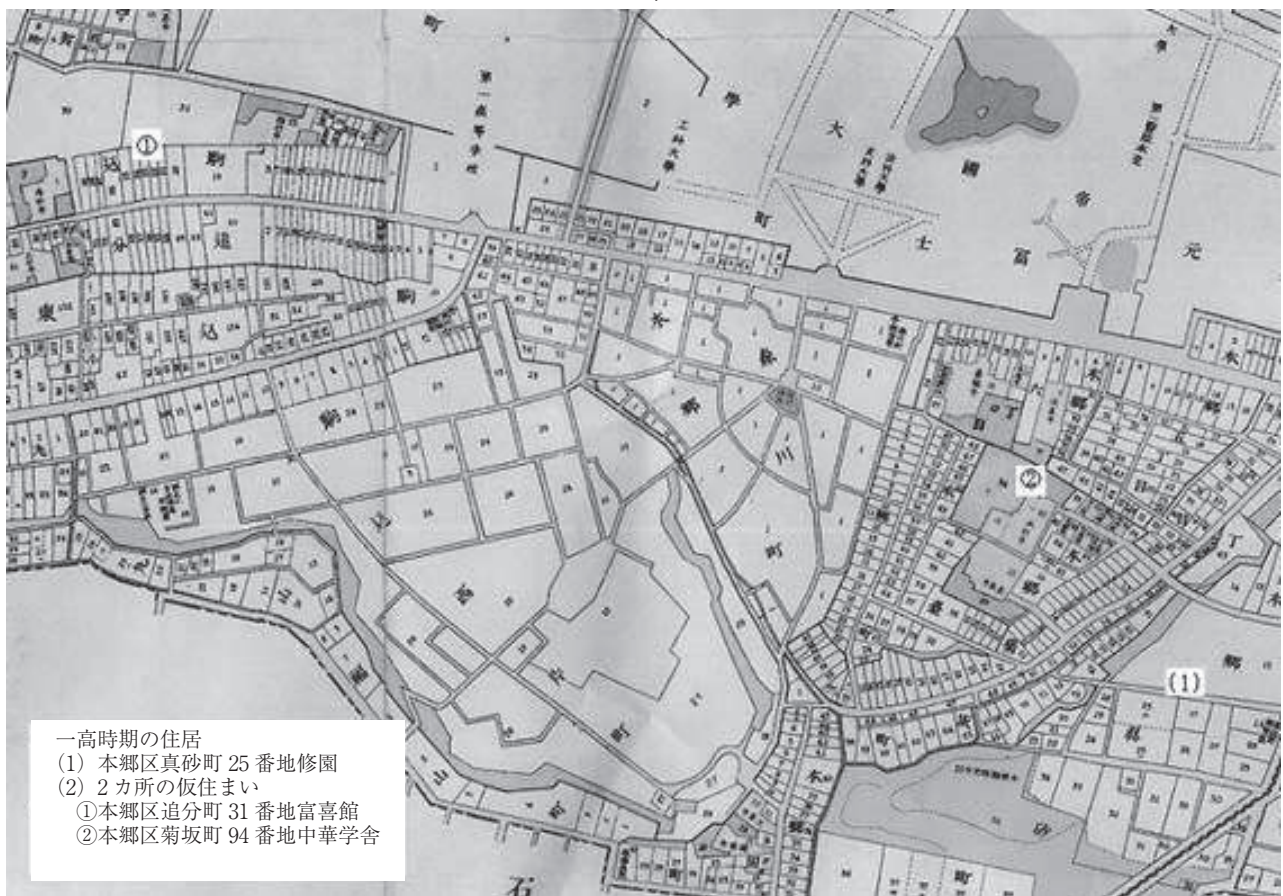
資料2からわかるように、物理、化学は教科書があり、授業はほぼ教科書に則って進められたようである。数学の場合も教科書はあったが、「一次方程式連立方程式二次方程式」、「級数順列組合」、「平面立体」など、学習内容まで具体的に規定されている。英語は複数の教員によって担当されるので、教科書の選定に難易度の統一が求められていた。日本語は週6時間の内、4時間を「講読」、残りの2時間を「文法」と「作文」・「書取」に充てていた。「書取」の時間に「新聞記事」を教材に使ったところは興味深い。学習方法として「専ラ生徒ヲシテ輪講セシム」、「文語法ヲ筆記セシム」とある通り、小集団による討議形式か、反復練習による暗記が中心だったことが考えられる。「会話」は成績不良者のみを対象に第2学期から実施するという点を見ると、大正期においても口語は日本語教育の重点でなかったことが伺える。

## 2-2 特設予科時期の郭沫若の住居一本郷区真砂町 25 番地修園

ところで、特設予科時期の郭沫若はどのような生活環境のもとで勉学に励んでいたのであろう。家信14（10月22日）によれば、「大塚は学校から遠いので、最近呉鹿薺・葉季孚と3人で貸家を借り本郷に移転しました。住所は本郷区真砂町25番地修園です」と報告している。9月29日付の家信12の住所がまだ大塚だったので、引越は10月に入ってからのことと考えられる。前述した楊伯欽はすでに東京高等師範学校を卒業して帰国したのであろう。

本郷区真砂町25番地は、東京における郭沫若の2カ所目の住居であり、特設予科時期は彼がほぼこの地で生活していた。現在の文京区本郷4丁目9-25真成館ビルに該当する。1904年（明治37年）以降ずっと隣接地に居住しておられる諸井氏の証言によれば、諸井邸の旧住居表示は真砂町17番地、隣

資料3 特設予科時期の住居と、第一高等学校との位置関係



出典：『明治四十年 東京市十五区番地界入地図』人文社

接する真成館ビルは25番地、そこから先は18番地であったという。資料3は『明治四十年 東京市十五区番地界入地図』である。右下の、真砂町の2本目の小さな路地の南側にはっきりと17、25、18の番地表示が読み取れ、諸井氏の証言と完全に一致している。旧18番地に明治期から坪内逍遙や正岡子規など多くの文豪が住んでいた。その印として、現在文京区教育委員会が設置した「坪内逍遙旧居・常磐会跡」の碑が立っている。郭沫若はまさにこのような人文的雰囲気が濃厚な地で同宿人の呉鹿蘋が持ち帰った謄写版の英語補充教材から、タゴールの『新月集』のなかの詩に触れる機会を得るや、その作品に魅了されていったのである<sup>(37)</sup>。時はタゴールがノーベル賞を受賞して2年、彼の来日より1年前の1915年春のことであった。

真砂町の住居は借家であった。前掲『日本遊学指南』によれば、当時留学生の寄宿先は、学校の寄宿舎・下宿・借家の3種類がある。「下宿」の場合は、下宿の主人がすべての面倒を見てくれるので「もっとも便利」だが、欠点は下宿にいる人が「ごっちゃ」で、「よしあし」が一概に言えない。借家は数人一緒になければ借りられないが、「中国のいっさいのならわしは、我が意のとおりやれる」ところから、最もいいのが「半年か1年してから、ともだちと借家する」ことが勧められている<sup>(38)</sup>。郭沫若らはまさにそれを実践したのである。それだけでなく、割り勘の貸家は部屋代と食費、トータルで10～12円程度で済まされるので、下宿屋より若干安かったことも考えられる。ここでの共同生活について、同宿人の呉鹿蘋が次のように追憶している<sup>(39)</sup>。

「私が一高を卒業しようとする年に郭さんが一高の予科に入ってきた。私と郭、葉季孚3人で学校に大変近いところで一軒の家を借りた。郭さんと私は2階に住み、葉季孚は1階に住んでいた。私は郭さんに日本語と英語の補習を手伝ったことがある。郭さんは記憶力がよく、数回読むだけでしっかり覚えられた。3人が共同で女性のお手伝いさんを雇い、まとめて食事を作ってもらった。彼ら2人の日本語は私に及ばなかったので、食事の管理は私が担当していた。毎月の初めに私が彼らから食費を集め、月末にまとめて清算する。私はよく自分の好き嫌いで食事を手配していた。私が長芋や小豆類が好きだったが、彼らの口には合わなかった。郭さんは口に合わなくても何も言わなかった。彼らに担当させようとしたが、彼らは引き受けない。意見を求めるとただ『随便喫(適当に食べよう)』と返答するだけだった。すると、君たちが担当しないのなら、『随便(適当)』に食べようと、私は言った。」

郭沫若も家信16(11月16日)において、「私が今住んでいる修園は大変清潔で、勉強に最も相応しく、前に住んでいた大塚の時よりずいぶん楽しいです」と、家族に報告している。

3人は真砂町に8ヵ月しか住まなかった。後述するように1915年5月7日、郭沫若と同宿人が「対華二十一カ条要求」に抗議するため、当時の多くの中国人留学生と同じように一度帰国したからである。帰国前に「書籍を売り」、「鍋や茶碗まで売り払った」というから、貸家は引き払ったのであろう。

### 2-3 特設予科における学校生活

『書簡』には東京時期の手紙が28通収録されている。福岡時期や岡山時期よりも多い。ただし、学校は9月11日に始まり、12月24日に第1学期が終了、冬休みはわずか15日であったとか、第2学期と第3学期はそれぞれ1915年の1月8日と4月11日に始まっていて、6月14日～21日は卒業試験、7月1日に卒業証書を受け取ったなど学校行事が羅列的に記されたことが多く、一高特設予科の学校生活そのものに言及した箇所はあまり多くはない。抽出すると次のようになる。

10月28日：「表は第一高等学校正門です。私は毎朝登下校する時ここから出入りします。」

11月16日：「本学期はまもなく終了し、試験となります。予科の理科の勉強は難しくありません。」

11月26日：「東京は四川に比べて寒さが厳しく、風砂が多いです。この頃は雨の日になると火に当たりたくなります。(中略)勉強はとても面白く、以前のような浮ついた気持ちはなく

なり、ずいぶん落ち着いてきました。』

12月2日：「今日はもう12月2日となりました。試験が差し迫っていて、準備が大変忙しいです。(中略) 天気はだんだん寒くなり、教室内は昨日からストーブが点けられるようになりました。朝登校すると必ず数名の生徒がストーブを囲んで談笑しています。その情景は中国国内の生徒とあまり変わりはありません。』

楽しく充実した校内生活が目につかぶ。勉強への言及が少なかったのは、勉強がたいして負担にならなかったからであろうか。同期の銭潮は「回憶沫若早年在日本的学習生活」において当時のことを次のように記している<sup>(40)</sup>。

「沫若は勉強にとっても真剣であった。東京にいた時彼の日本語はもうかなり上手であった。(中略) 背が低くて頭が大きく、また寡黙で勉強好きだったため、同級生達に『郭大頭』というあだ名を付けられた。理解力と吸収力が特別すぐれていたからでもある。彼は数学・物理・化学の成績がよく、特に数学はクラス11名のうちトップだった。ある日、先生が黒板に数学の問題を書いたが、みんな一所懸命考えても答えを得ることができなかつたところ、沫若が登壇してチョークですばやく書き、解き方を説明しながら、瞬く間に正確な答えを導き出した。みんなすっかり感服した。』

いっぽう、先輩で同宿人の呉鹿蘋が次のようなエピソードをも披露している。「郭さんは文系が好きで、数学は好みではなかつた。彼が試験の準備をする時、数学の問題に丸を付けてくれと私に頼んだ。予科第1学期の期末試験の際に私は10問に丸を付けてあげたが、そのうちの3問が試験に出た。」郭沫若自身も数学が苦手だから、第三部の医科を選んだと言っている。また『創造十年』において「一高予科の1年間は私の青年期における矜持の頂点であった。銀座のカフェ屋は勿論、浅草の映画館にさえ行ったことはなかつた」と述べている<sup>(41)</sup>。

なお、『第一高等学校一覽』第3冊(大正3-4年)に郭沫若の本名、郭開貞が掲載されている。

#### 2-4 日中間の緊迫した関係への反応

郭沫若の日本に対する最初の印象は「勤勉儉約と淡泊を尊び、清潔が好き」で、大変よいものであった(家信4)。また、一高に合格してから弟の郭開運に日本留学を勧め、「国内は教科が不良で、校風も悪い」(家信8)と、間接的に日本教育の先進性を称賛している。ただ、超エリートの自負をもった当時の留学生は中国国内外の厳しい社会情勢や日中間の緊張した関係に常に敏感に反応していた。郭沫若は房州海水浴の時の体験を次のように語っている<sup>(42)</sup>。

「その鏡の中に時々意外なるものが現れて来ることがあつた。朝早く浜へ散歩しに行つたりすると、遙か沖の方でまだ消えない海霧の中から黒いものが山の様にぬうと陳列して居た。それは夜中に停泊に来た軍艦だつた。一艘、たまには三五艘。海の景色に一種の奇観を添へる趣もないではないが、然し、穏やかなものでは無論なかつた。殊に異郷人の吾々には色々の聯想を喚起する作用を十分持つて居た。(中略) 海湾の形は地図上の渤海湾によく似て居るので、軍艦を見ると、自から……思ひを巡らせざるを得なくなつたものだ。」(旧体字を新体字に直し、その他は原文のままにした。筆者)

第一次世界大戦の勃発と日本の参戦、日本軍による青島・膠州湾の攻陥が相次ぐなか、郭沫若は、みずからの安否を心配しているであろう家族に気を遣いながら、家信のなかで次のように書き記している。1914年8月29日：「今西欧諸国が戦争を起し、戦禍はだんだんと東アジアに移ってきています。日本はドイツに宣戦布告しました。」

9月6日：「欧州の戦争について、内陸地では噂も多いと思います。中日両国は揉め事を起こさないでしょう。私は日本にいますが、特にご心配はいりません。」

1915年3月17日：「最近日中間の交渉事案が暗礁に乗り上げ、世論が沸騰しています。故郷の四川は辺鄙で情報が閉塞し、不確実な風聞でさぞ一層の騒ぎと驚きを増していると思います。私

はこの国において、今は相変わらず授業が続いています。留学生の中には帰国する人も少なくありませんが、彼らの多くは私費留学生であり、官費学生はまだ動いていません。(中略) 我が国の古い兵法が言うには驕れる兵は必ず敗れます。日本の驕横は絶頂に達していると言うべきで、天はこれを見ていないのでしょうか。]

4月12日：「春休みが終わり、昨日授業が始まりました。今この国は桜が満開です。(中略) 飛鳥山は市内に近い桜の名所で、昨日友人を誘って一緒に見に行きました。(中略) 欧州の戦争はまだ解決しておらず、中日間の交渉も膠着状態です。夏までには決着がつくでしょう。」

5月5日：「交渉は険悪となり、まもなく帰国します。このような時局に際し、自ら慎ましく行動すべきです。どうかご心配しないでください。」

また、この時期の未公開の書簡によれば、彼は両親への手紙の中で第一次世界大戦に言及した時、「戦争を引き起こす者はみな神仙ですが、災難を受けるのはわれわれ民衆のみです」とも述べている<sup>(43)</sup>。1914年10月末に中国の領土で起きた青島の戦いや、山東におけるドイツの権益を含む善後処理をめぐって、大隈重信内閣が1915年1月に袁世凱政権に突き付けた「対華二十一カ条要求」など、この時期日中間に広がった緊迫したムードを回顧してみれば、郭沫若ら中国人留学生の動揺と混乱があったことは想像に難くない。とうとう5月7日、郭沫若も同宿の呉鹿蘋・葉季孚と一緒に帰国への途に就く。上海に辿り着いた時は袁世凱政府がすでに「二十一カ条」を承認したので、11日に彼はまた東京に引き返した。

今回の帰国について、両親や兄弟から厳しい叱責を受けた。本人も「軽率に失した」と深く反省している(家信25, 28)。学生の本分を守って学業に専念したかったが、個人は所詮大勢に逆らうことができなかったのであろう。

東京に戻った郭沫若は卒業するまでの2カ月は下記の2カ所に仮住まいしながら卒業試験に参加し、7月1日に一高特設予科の修了証書を手にした。仮住まいしたのは、本郷区追分町31番地富喜館(現・向丘二丁目5～7附近)と本郷区菊坂町94番地中華学舎(現・本郷5丁目14～15附近)で、資料3から分かるが、真砂町の住居も仮住まいの2カ所も一高から大変近く、いずれも学校まで徒歩数分程度の距離であった。

## むすび

以上、本稿では一高特設予科を中心とした東京留学時期の郭沫若の勉強と生活の状況を、資料に即してできるだけ具体的且つ全面的に考察を行った。郭沫若の日本留学は、清末に始まった中国人日本留学ブームを背景にそれなりの必然性があった。時期は折しも「五校特約」の実施と重なり、彼は長兄の援助と、長兄の成都東文学堂時期の同期生達の協力、および自らの努力で一高特設予科に入り、その後六高、九州帝大という日本留学のエリートコースへ進む切符を手にしたのである。

来日した郭沫若は、最初に文京区大塚3丁目辺りに下宿し、東京高等師範学校に在学した楊伯欽が彼の面倒を見ていた。一高特設予科の入学試験に合格した彼はさっそく先輩留学生達と千葉の房総海岸へ避暑に行った。一高水泳部を中心とした関東各学校の水泳健児の雄姿を目の当たりにして海水浴を満喫しながら、活気と野心にあふれた近代日本の機運をも体験したと考えられる。

一高特設予科の1年間は、郭沫若が日本語・英語・ドイツ語・数学・物理・化学などの基礎科目を履修し、楽しく充実した学校生活を送ったと考えられる。そこで施された予備教育とキャンパス生活に満足し、何らの不満はなかったようである。彼に不満がなかったことをもって、一高特設予科の教師陣や教育内容・時間数配分などの措置が適切で、予備教育としては成功だったと言えるかどうかは筆者には断言できない。ただ、1923年「対支文化事業」の発足に伴う、特約五校以外の官立高等専門学校にお

ける特設予科の増設は一高と東京高等工業学校の「成功経験」に基づいた発案であり、実際、「対支文化事業」下で展開された学費補給基準の議論においても五校特約制度に準ずるという提案が出るほど、「五校特約」による留学生教育が後の日本の対華教育施策においては評価されていた<sup>(44)</sup>。

一高時期の郭沫若は日本人学生との交流がほとんどなかった。特設予科は留学生のみの教育なので、日本人学生との接点が少なかったことが一因に挙げられるであろう。しかし、それだけではなかったのではないかと筆者は考える。学業以外のところでは、日中両国の学生同士は基本的に無関心・無関係だったのではないかと、一高本科関連の資料を読んでいて感じられた<sup>(45)</sup>。

いっぽう、郭沫若は校外でも交際がほぼ留学生同士に限られていた。受験準備の際は楊伯欽と一緒に下宿生活を送ったが、一高に入学してからは同じく一高在学の呉鹿蘋・葉季孚と3人で借家し、お手伝いさんを雇って暮らしていた。下宿から借家への住居移動は、当時の留学生生活の主流パターンだった。借家は、旧本郷区真砂町25番地に位置し、現在の文京区本郷4丁目9-25真成館ビルの場所に該当する。一高に近く清潔で、勉強にふさわしかった。また、同地は明治中期から坪内逍遙や正岡子規などの文学者が居住していた文化的雰囲気が漂うエリアで、彼らは官費ならではの比較的ゆとりのある留学生生活を送り、同宿人同士が互いに切磋琢磨して思う存分新しい知識の吸収に没頭していた。郭沫若はこの地でタゴールの作品に触れ、魅了されていったのである。この住居で彼らは1914年10月から翌年5月まで8ヵ月ほど住んでいた。

1915年5月、「対華二十一カ条要求」をめぐって日中両国間では開戦の危機が迫り、3人は多くの留学生と同じように借家を引き払って帰国したが、時局の急展開で郭沫若はまた東京に引き返してしまう。住まいを失った郭は、住所を転々と変えながら一高特設予科の学業を続けざるをえなかった。6月下旬に卒業試験を受け、7月1日に特設予科の修了証書を授与されたのである。

巖安生は、彼の中国人留学精神史研究の2冊目である『陶晶孫—その数奇な生涯—』において、大正以後、即ち民国初期に来日した創造社グループを代表とした留学生一群を留日第二世代と称している。また、新式学校教育の下で育った「中国近代初の知識青年」としての彼らは日本側の選抜試験を受け、「激動と波乱、豊饒性と多様性の際立つ大正という時代に青春を過ごし」、「一国の支配層たる学歴貴族を養成する旧制高校・帝国大学という最高学府に身を預けること十年」、彼らの身に「『化学』的な変化あるいは変化<sup>へんげ</sup>」が発生したと指摘している<sup>(46)</sup>。大正教養主義と旧制高校の特殊な文化的雰囲気が留学生の知的成長と人間形成に大きく影響したことを力説したものだが、東京時期の郭沫若は、厳しい受験競争、新しい環境への適応、留学先での初めての正統な教育課程をこなしていく上での重圧などで精いっぱいであった。タゴールの作品に接してその斬新さに惹きつけられても、みずから新詩の創作にチャレンジするような余裕も技量もまだなかったと思われる。「驕れる兵は必ず破れる」といった批判的・日本観は、当時の緊迫した日中間の危機意識と祖国の存亡への深刻な憂慮から生じたもので、前述した未公開書簡にも記されたように、彼はむしろ普通の勉学に励む一留学生として戦争を批判し、平和な環境での留学継続を渴望していたと言えよう。「二十一カ条」に抗議して一斉帰国の隊列に加わったのも、個々の現状認識に基づいた突発的で感情的な対応であって、「化学反応」的な変化にはまだ至っていない。「化学反応」を見せるまでの彼に関する克明な追跡はなお課題として残されている。

## 注

- (1) 例えば、日中国交正常化後の最初の日本語ラジオ放送講座の担当者。元復旦大学教授蘇徳昌が「中国人の日本観—郭沫若」(『奈良大学紀要』第29号、2000年)において、「五四運動時期・北伐・日中戦争から中華人民共和国の成立・農地改革までは、彼は基本的に手柄を建てたとと言えるけれども、それ以降亡くなるまでは完全にナンセンス或いは逆効果であった」と述べている。
- (2) 岩佐昌暲「日本における郭沫若『女神』の研究」『海外事情研究』(熊本学園大学)第39巻第2号、

2012年；巖安生『陶晶孫—その数奇な生涯—』岩波書店，2009年，同「“あわい”を生きる—陶晶孫と郭沫若の九大留学時代—」『特集 第12回日本研究国際セミナー—21世紀の世界と日本の課題—』福岡ユネスコ協会，第38号，2002年；税海模「郭沫若留学日本の多重人生意義」；岩佐昌暲・藤田梨那・武継平編著『郭沫若の世界』花書院，2010年など参照。なお，鄧小平が郭沫若の追悼会（1978年6月18日）において，「共産主義事業のために終生奮闘努力した忠実な革命家」，「卓越したプロレタリア文化の戦士」，「我が国の傑出した作家・詩人・劇作家」，「マルクス主義の歴史家・古文字学者」，「魯迅に次ぎ，中国共産党の指導の下で，毛沢東思想に導かれた，我が国文化戦線に於けるもう一つの光り輝く旗印」と評している。

- (3) 前掲蘇徳昌 [2000]。
- (4) 蔡震『文化越境の旅行—郭沫若在日本二十年』文化芸術出版社，2005年，および「『郭沫若與日本』在郭沫若研究中」『当代視野下的郭沫若研究』巴蜀書社，2008年。
- (5) 前掲岩佐昌暲 [2012] 参照。
- (6) 清末民初の「量から質へ」の留学政策の転換は，大里浩秋「『官報』を読む」（大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房，2002年），および阿部洋「『対支文化事業』の研究—戦前期日中教育文化交流の展開と挫折—」（汲古書院，2004年）第I部を参照されたい。
- (7) 唐明中・黄高斌編注，四川人民出版社，1981年。郭沫若の第一夫人・張瓊華が保管した手紙を，編注者が調査に基づいて整理編集し，「説明」を加えたものである。後に，研究が進むに従って一部の手紙の年代と日時が訂正され，それはある程度大高順雄・藤田梨那・武継平訳『桜花書簡—中国人留學生が見た大正時代—』（東京図書出版会，2005年）に反映されている。2007年，郭沫若の実子である郭平英が『書簡』収録の手紙の日時についてさらに全面的な考訂を行い，新たな時間序列で「郭沫若1913～1923家信一覧表」を整理している（『郭沫若家信集『桜花書簡』への訂正と補遺』『北東アジア研究』第13号）。本稿は，混乱を避けるため1981年版『書簡』の整理番号に基づいて，おのおの書簡を「家信4」とか「家信12」の形で記す。
- (8) 8人とは，具体的に長男郭開文（1878-1936），長女郭秀貞（1881-1952），次女郭麟貞（1884-1951），次男郭開佐（1888-1963），三男郭開貞即ち郭沫若（1892-1978），四男郭開運（1895-1971），三女郭蕙貞（1897-1938），四女郭葆貞（1899-1970）である。廖久明主編『郭沫若家世』復旦大学出版社，2010年参照。
- (9) 成都東文学堂についての詳細は，拙著『中国人の日本留学史—清末の東文学堂—』学術出版会，2005年，109-112頁を参照。
- (10) 拙論「關於郭開文日本留学の初歩考証—清末留日大潮中的一个個例—」（前掲廖久明主編『郭沫若家世』[2010]），同「郭沫若三兄弟の日本留学」神奈川大学留學生史研究会での報告資料（2011年7月9日）参照。
- (11) 郭沫若『少年時代』人民文学出版社，1979年。
- (12) 前掲『少年時代』。
- (13) 郭沫若『学生時代』人民文学出版社，1979年。
- (14) 前掲『少年時代』174頁。
- (15) 天津陸軍軍医学校は，1902年袁世凱が創設した北洋軍医学校より改名されたもので，辛亥革命以前は教習がほとんど西洋人か日本人であった。辛亥革命以降はほかの新式学校と同じく，本校の卒業生や海外留学して帰国した人を用いるようになり，郭沫若はそれが気に食わなかったようである。ちなみに，この時期アメリカ留学から帰国した中国最初の女子日本留學生と言われる金雅妹も，袁世凱の協力を得て天津で医学校を経営していた（周一川『近代中国女性日本留学史』社会科学文献出版社，2007年による）。

(16) 前掲『学生時代』9頁。

(17) 郭沫若「自然への追懐」『文芸』1934年2月号。

(18) 前掲武継平 [2002] 7頁を参照。

(19) 郭開文と張次瑜のやりとりは次の通りである（『少年時代』335-336頁）。

在十二月二十七日的晚上——這個日期我是沒世不能忘的——大哥的一位朋友張次瑜，來訪問他來了。（中略）大哥替我把我的情形告訴了他，最後是說到沒有出路，不知道該怎樣的好。

——“何不送到日本去留學呢？ 能夠的時候我可以幫忙送去啦。”

国会被解散以後，所有旧国会議員每人是照原薪支給三個月，發遣回籍的。張領到了這三個月薪金，便決心往日本去遊歷，（中略）他在二十八號便要動身，特別走來向大哥辭行。

——“我也想到這層，”我的大哥回答他，“但你知道我目前是没有收入的人。”

——“日本留學不還有官費嗎？ 考上了官費不是就不要你供給了嗎？”

——“官費是誠然有的，但只剩下四校，是東京的一高，高師，高工，和千葉的醫專，但都很難考的。（中略）連最小限度的一年半的學費我現在的力量都供給不起。”

——“有半年的工夫怕也够了罷？”張說，“……，年輕人比我們腦力強，有得半年的工夫怕可以够了罷？”

(20) 『日本遊學指南』（章宗祥著，1901年）によれば，當時留學生の宿泊種類は，①学校の寄宿舎，②下宿，③借家の3種類があり，下宿の場合，上等の部屋代は「1か月およそ5～6円，食費1か月10円」であった。また，『日本留學指掌』（崇文書局編，1906年）掲載の諸費用に，「食費」欄がなく，寄宿料が10円～15円となっている。ここでは，実藤恵秀『中国人日本留學史』くろしお出版，1960年，および孫安石『経費は遊學の母なり』—清末～一九三〇年代の中国留學生の留學経費と生活調査について—（前掲大里・孫編 [2002]）による。なお，武継平は前掲書8頁において同手紙の内容に基づき，郭と楊は「二人で下宿の部屋を借りている。借りたのはたったの一間で，家賃は毎月十五円だった（一人7.5円）」と述べている。

(21) 清末民初の留學生政策と実施状況については前掲大里 [2002] が詳しい。

(22) 武継平は前掲書において，「尋常話少能上口」を「日常会話（日本語）は練習するチャンスが少ない」と日本語訳し，来日後，郭沫若がずっと楊伯欽と「同居し，日本語学校に通う以外めったに外出しない彼には，日本語の会話を練習できる相手がいないので会話力やヒヤリングの力はあまり進歩していない」と解釈をしている。

(23) 前掲郭沫若「自然への追懐」[1934]，及び『学生時代』10頁。

(24) 『六十年史』500-501頁。

(25) 『六十年史』480頁。

(26) 『郭沫若全集』第12巻，人民文学出版社，1982年，14頁。

(27) 前掲郭沫若「自然への追懐」[1934]。

(28) 『書簡』40頁。

(29) 『千葉史学』第60号，2012年。

(30) 『六十年史』480頁。

(31) 31名のうち，唐演，鐘廣言，劉冕執，劉成志，陳治安の5名が1906年9月から1909年7月にかけて，郭沫若の長兄開文と一緒に東京帝大法科大学に設けられた「選科」で政治学か法律学を学んでいた。前掲拙論 [2010]，および薩日娜「旧制第一高等学校に学んだ初期京師大学堂派遣の清国留學生について」『科学史研究』第49巻，2010年参照。

(32) 『六十年史』501-503頁，511-513頁，515頁。

(33) 武継平前掲書 [2002] 14-15頁。なお，同「郭沫若與日本一高預科及岡山六高詳考」（『創造社作

家研究』1999年)においては、「大正十四年八月十一日その規定を創定するに至る迄は、別に規定を設けざりき」を「大正十四年八月十一日新制定有関規定以前、曾有另行規定」と中国語訳されている。下線部は筆者。

- (34) 前掲『学生時代』31頁。
- (35) 前掲周一川著書〔2007〕が収録した民国初期の中国女子留学生の受入れ校である東京女子高等師範学校・奈良女子高等師範学校・日本女子大学校などのカリキュラムにおいても、体育は週3時間となっている。
- (36) 『六十年史』513-514頁。
- (37) 郭沫若「我的作詩的經過」1936年。ここでは『郭沫若全集』第16巻、人民文学出版社、1989年による。
- (38) 前掲実藤恵秀〔1960〕178-180頁参照。
- (39) 『書簡』40頁。
- (40) 『中国現代文芸資料叢刊』第4輯、上海文芸出版社、1979年。
- (41) 前掲『学生時代』101頁。
- (42) 前掲郭沫若「自然への追懐」〔1934〕。
- (43) 李保均『郭沫若青年時代評伝』重慶出版社、1984年、65頁。同著書は注において「手紙の実物は楽山文管所が保存していて、未発表である」と記している。なぜ「未発表」となったのかは説明していない。また、著者は『書簡』が公表される前に楽山文管所で留学期の郭沫若が日本から家族に寄こしたすべての手紙と写真を調査・閲覧していて、手紙は70通以上あったと言っている。しかし、前述したように『書簡』には66通しか収録されていない。長年『書簡』の訂正と補遺に尽力してきた郭平英氏もこの脱落に気付いていないのはなぜであろう。
- (44) 前掲阿部洋〔2004〕第Ⅱ部第四章、第Ⅲ部第三章を参照。
- (45) 『向陵誌』（非売品、1913年）には、1912年両国生徒の「交情甚だ冷淡」たることに鑑みて一高日華同学会が設立されたとある。
- (46) 前掲巖安生〔2009〕vii-xiii。

付記：本論文は、アジア教育会第6回大会（2011年10月）と第37回中国人留学生史研究会例会（2013年10月）で行われた口頭発表を基に加筆・修正して完成したものである。資料調査に当たり、真砂中央図書館と文京区在住の諸井氏にご協力をいただき、岡山の研究者名和悦子氏に貴重な資料をご提供いただいた。論文仕上げの段階において、大里浩秋先生に多くの建設的なご意見をいただき、文章をていねいにご添削いただいた。合わせて謝意を表す。